

小説

自由とは何か

私は私の属しているものを知ることにはできない。また、私が属しているとされるものも、私を知ることにはない。さらに、私が私を属しているとするものを推測することはできるが、本当は知ることにはできない。

私がこれらを知ることができるとすれば、それはファシズムということであり、私自身の自由からも、あらゆる存在の自由という問題からも遠く隔てられてしまうということである。

紙田 彰

—第5回 紙田彰 油彩新作展 "自由とは何か" に添えて上梓する。

本稿は小生の主宰するWEBサイトに連載しているものであるが、この三年に亙る、ある経緯いきさつからなる絵画作品の制作活動とも関連している。今回、“自由とは何か”と題する油彩作品を軸にした個展の開催にあたり、冊子の形でこれに加え、読者諸氏のご高覧を願う次第である。

WEB サイト「紙田彰の世界」

<http://www.naoe-ya.co.jp/ryokuji/>

私は私の属しているものを知ることにはできない。また、私が属しているとされるものも、私を知ることにはない。さらに、私が私を属しているとするものを推測することはできるが、本当は知ることにはできない。

私がこれらを知ることができるのであれば、それはファシズムということであり、私自身の自由からも、あらゆる存在の自由という問題からも遠く隔てられてしまうということである。

(話をどこから始めるか?)

私はまずあなたに問いかける。あなたは私自身であるかもしれず、また私の隣のあなたであるかもしれない。また、私とはまるで無関係なあなたであるかもしれない。しかし、いずれにしても、私は問いかけるためにあなたを必要としている。

あなたは私を包んでいるのかもしれないし、あなたは私の隣にいるのかもしれない、あるいはあなたは私に属しているのかもしれない。いずれにしても、あなたは私がいなければ、私に問いかけられる必要に遭遇しない。

だが、私が問いかける事柄はどこからやって来るものなのか。あるいは、どこからやって来るべきものなのだろうか。ついでに述べるなら、いつやって来るのだろうか、いつやって来るべきなのだろうか。

そもそも、私は何を問いかけて、その問いかけがどのような意味を持つのかをいまだに知ることができない。何を考えようとしているのか、何を始めようというのか、私にはまだ何も見えていないのである。

おそらく、私は何かの一部に問いかけているには違いない。その一部がどのようなものか一部なのかは永久に知ることないだろうが、たしかに何かの一部分であるということには誤りはないだろう。私の考えはこうだ。私はあらゆる「部分」に侵襲されている。

あなたは勿論、この侵襲してくる「部分」のうちにあるものだ。それは、「あなたたち」という不分明な言い方をすべきものであるだろうし、また、だからといって、限定的な「あなた」という言い方が妥当でないとするべきものでもない。

紙田 彰(かみた あきら) 1951年、洛陽にて出生

●詩集

初期詩集『沈腸遊び—Enema Game』(1974年刊)

詩集『魔の満月』(1977年、書肆山田刊)

詩集『緑字生ズ』(1987年、書肆山田刊)

●主宰誌

詩誌『地獄第七界に君臨する大王は地上に顕現し人体宇宙の中枢に大洪水を齎すであろうか』略称フネ

【創刊号】 1975.9

【第2号】 1975.12.15

【廃刊号(第3号)】 1976.4.15

詩誌『緑字生ズ』

【創刊号】 1983.7

【第2号】 1983.12

【第3号】 1984.6

【第4号】 1984.12

【第5号】 1985.12

現在、WEBサイト「紙田彰の世界」(<http://www.naoe-ya.co.jp/ryokuji/>)で活動再開。

また、ポータルサイト「萬物混淆ス」(<http://www.naoe-ya.co.jp/BANBUTSU/>)を構築中。

私が考えているに違いないのは、あなたが弁証法的な三角形の内部にあるのではなく、表層を部分に持つ、見えないもののその表層の部分であるのではないかということである。だから、私が問いかける対象のあなたとは、私の影であるというべきではなく、独立した表層の部分というべきである。

あなたはどのような場合でも、あなた自身である。そうだ。私が問いかけようとしたのは、そのことなのだ。「私はあなたであるか?」「あなたは私であるか?」あなたはすべての場合において、あなた自身の何ものでもないのだから、私はあなたではないし、あなたは私ではない。

このことは次のような問いかけでも同じである。「私はあなたが見えるか?」「あなたは私が見えるか?」私はあらゆる場合においてあなたを見ることはできないし、あなたは私を見ることはできない。

では、私はあなたに問いかけることは可能なのだろうか。また、私はあなたに問いかけずに私としてありつづけることが可能なのだろうか。もっとはっきり述べるなら、私が私に問いかけるということはありえないし、絶対不能なのであるから、あなたに問いかけることが不可能なら私は絶対の沈黙を余儀なくされるだろうし、私のあらゆる問いかけが存在しなくなる。

あなたは私にこう答える。「そのように考えることが、すでにあなたが『あなた』と呼ぶ私の一方の考えであり、その私の一方の考えが、あなたの考える一部でもあるはずだ」

「けれども」と、あなたは付け加える。「あなたの私への問いかけは、私になされたものなのか、あるいはあなたの発しえたものなのかは定かではなくなってしまうが、そもそもそのような問いかけが行われたのかどうかさえ明確ではなくなってしまう」

たしかに、もうすでに私の中では、そのような問いかけは踪影もなく消失してしまっていた。そして、「あなた」という言葉の証拠すら残さず、私は私の表層を見つめていた。

あなたは私に属しているのか？ 私がそのような疑問を抱いてから数日たった夜のことである。それは、私に属するはずの意識の一つで、肉体の部位としては大動脈の腹部にある解離性の瘤と繋がっているもので、その大動脈瘤の持つ意識ともいえる。

意識 A は次のような来歴を私に語り始めた。

A が自らを知りえたのは、大動脈に突発的に生じたときではなく、私が A の病理的な存在を認めざるをえなくなった時点であった。A は最初、私の願望から、自らが一時的な存在で、数カ月もすれば瘤としての形は失われるかもしれぬと考えていた。しかし、結局、瘤は閉鎖することではなく、存続しつづけた。

「私は、物理的に大動脈に生じたときに誕生したのか、あるいはあなたが私の存在を信じたときに誕生したのか、私自身よく分からないところがある」

また A は、A 自身が血管内に生じた空洞としての物理性であるのか、空洞を造る血管の持つ特殊意識であるのか、あるいはその両者の統合体であるのか、はたまた医学の捏造なのか、私の信仰あるいは妄想であるのか、自分でも確かなことは分からないと繰り返した。

「だが、あなたは肉体を持っているのか？」私は A への問いかけをこのような言葉で始めることにした。「あなたは A であるはずだから、A の意識を持つ身体という統合的機能、あるいはある一つの機構としてたしかにあるということは言えるのだろうが、血管に出来た瘤という、つまり空洞である以上、肉体を欠落させられていると言えないだろうか」私はもう一つの疑問、空洞という肉体はありえるのか、いや肉体はそもそも空洞を包み込んだもの、肉体の本質は空洞にあるのではないかという疑問は、ここでは差し控えることにした。

A は「私自身にとっては、肉体の欠落感というものは意識することはできないのだが、私という空洞の反対側、つまり二種類の血管膜のそれぞれの向こう側にあるものは、不可視であるとはいえ、隣接感には直観できる」と応じた。そして、ある重要な問題を提起した。

「その直観は、存在を予感することはできても、何ものをも見ることも、

本質に到達することもできず、隣接する感覚はあっても、生起している現象に遭遇することはありえないといえるのではないか。血管の層をなす外膜と内膜の向こうにしか、私にとっては推測できる世界はありえないし、あなたにしたところで、またあなたの一切の問いかけにしても、私の推理でしかないということが、私の本質を決定づけているに違いない」

大動脈の偽腔である A の意識は私に以上のような問題を突きつけたのである。

肉体は肉体に語らせよ、このときに言う肉体とは部位としての肉体である。身体は機構であるが、肉体はぶつ切りの個体である。生命活動を続ける以上、意志がある。いや、意識と言ったほうが明確になるかもしれない。肉体の部位が独立して何かを感じ、思惟し、肉体が肉体の意識をゆらぎ立たせて蠢きはじめる。脚や腕の関節はもとより、内臓や性器、体毛、爪、さらに細胞の一つ一つが自らの意志を、それと気づくこともなく、意志を立ちのぼらせる。私は何のことについて述べているのだろうか。おそらくそれは、神秘主義や機械主義的な外圧を持たない、立ち上がる部位の、いわゆる舞踏のことをイメージしているに違いない。肉体に任せよ、ということは可能である。しかし、身体に任せよということは不可能なのだ。肉体は肉体の意識を律動させるが、身体は肉体を統御している。

私から最も遠いところから、その痛みは伝ってきたのかもしれない。それとも、その距離は、痛み自体がもたらしているのかもしれない。支えるものが稀薄になれば、それだけ速さはいやましてくる。支えるものとその意識が私自身から離れていくときに、痛みの速度は直接的な物質性を私に示してくる。それは、まるで痛みがつねに隣接しているように、私そのものに侵襲してくる。べったりと貼りつき、その接触面から貫通してくるのである。

わたしはわたしの中の生きものたちのことをつねに意識していて、ともすると、いくつかの別々のかたまりの形でわたしの方に寄り添ってくるのを感じることもあるの。それはまぎれもなく複数の、別々の意識の重なりとでもいえるし、もっと具体的な、透明な膜の向こうに蠢く生命活動の原初の連なりとでもいう実感がするのよ。

女性の意識の中にある、子供を感じる特有のインスピレーションと関連しているのではなく、ひたすら愛おしいようななつかしいような匂いを伴いながら、自らを衝き動かさざるをえない、ある種、連動する他人たちの気配、ふるまい。

でも、あなたの方に向かうときは、あなたのたったひとつの側面を頼りにただつながっているにすぎないのかもしれない。そして、そのようなわたしが、あなたにとってはわたしたちが、無数にその側面を埋めているに違いないのよ。わたしのこの疼きが一定の充足感を伴い、そのようにしてわたしの存在を示すことにつながっているのだわ。

そうよ、わたしのこの欠落する意識が、あるいは充実する意識が、ときには痛みとなり、ときには痙攣となり、ときには甘い麻薬となって、あなたに浸透していく……。

私を覚醒させた痙攣が示すものは、こうした肉体の叛乱とでも言うものなのかもしれない。それはたいていの場合、前駆的にふくらはぎの外側にある筋に硬質の痛みを現し、たとえそのとき眠りにあるとしても、痙攣の予感を持続させていく。

私はその予感とそこから生まれる怯えによって、その意識、長い神経

線維を伝播してくる長く、細い意識に、眠りを圧迫されつづける。

わたしが囚われているのではないことを、あなたが示すことができるのだろうか、それともわたし自身が――。

わたしを一方向的に支配する意図はなくても、支配していることには変わりはないし、もちろんわたしを愛さねばならないという気持ちも、さらにわたしによってあなたが救済されるかもしれないという期待も感じられるわ。でも、それこそ、あなたの瞞着、傲慢さ、掴みどころのない循環。

あなたの表層はときとして硬くわたしの内側に訪れる。また、いつのまにか、やわらかく弛緩する。この硬直は支配を認めさせること、この溶融は憐れみと後悔――。けれども、わたしの満たされぬ時間の中では、どれがわたしとあなたのつながりの本当の姿なのかを、わたしもあなたも見出すことはできない。

わたしはわたしの内側から内側へという二重の外側へくるみだされ、その猥雑に絡んだ襞をたどり、さらにその底にある深い磁場へともぐり込んでいく。二重螺旋への下降、永遠の。そして、ここでまた問題にぶつかってしまう。けれども、それは何かを生み出すための二重性ということなのか、あるいは生み出されるわたし自身への下降ということなのか、いずれにしてもわたしから発している問題に遭遇しているということではなく、あなたが提示した答えに囚われているということになるのだわ。

わたしはそのようなわたしをどのように抑圧すべきか、そうすることでこれから生み出すすべてを許すことができるかどうか、憎むことができるかどうか、またそのようなわたしがそれにもましてあなたを要請していることも、またあなたがわたしに期待するすべての事柄をわたしも期待していることにゆき当たってしまったている。あなたはわたしの内側をいっそう慈しみ、わたしはあなたへの期待を慈しむ。

私は私の軟らかい部位に温かな吐息を感じること、ある種の熱狂を思い起こしていた。それは小波のように途切れることのない繰り返しの感覚である。これまでどのくらいの回数の訪れの感覚があったか、またこれからどのくらいの数の訪れを知るのだろうか。今、どのくらいの

数の訪れを得ているのだろう。

私はあなたの内側から私のこの感覚によって受け容れられているに違いないが、はたして私が受け容れているということをあなたは知っているのだろうか。

私はあなたに人間的な親愛を覚えているわけではないし、またあなたがそれを望んでいるはずのないことも充分理解しているはずだ。私はあなたをたしかに包摂しているのだから。

わたしはあなたの表層と接点を持っているだけで、あなたとはつながっているわけではないと、どうしても思いたいわけがあるのよ。わたしは、その理由について、わたしから言い出すことはありえないのだけど、たしかに強い理由があるのを知っている。わたしもあなたを愛しているはずがないし、これからも愛するはずのないことも、またあなたを憎むこともありえないはずだもの。わたしはわたしを、あなたと区別する必要があるのよ。わたしはあなたに侵略され、屈服させられ、あなたを埋め込まれているからだわ。これは屈辱であるけれど、おそらくあなたにとってあなたの汚点——。あなたが愛しているのはそのことなのかもしれないのよ。

それは、ある青みを帯びた灰色の夕刻。その灰色の濃霧の向こうに薄黄色の光芒が垣間見えるが、こちらの側は絶望の濃紺の帳に蔽われているだけだ。さらに時間はくつがえり、かすかな光も忘れ去られていくに違いない。

私の底部の秘められた闇、稲光がたえず閃くように、抑えきれない衝動的な葛藤がつかぬく暗黒。そのような憤りを生み出すのが何によるかを知るものが、いったいどこにいるというのだろうか。

知りえぬということの罪障、根深い疑い、想起するにいたらないための焦燥。つまり、古いもの、気の遠くなるような底部に、そもそもから用意されているはずの空虚というイメージに起因しているもの。だが、たしかに私自身がその意味するところの真実とその正体を知ることが不可能なのである。

私が傷つけるはずのもの、私を傷つけるはずのもの、それらは私に対して何をもちたすものなのか、またそれゆえに私をどのように扱おうというのだろうか。私はそれらの鋭い侵襲によって本当に傷つけられているのか、本当に何ものかを傷つけているのか。

それはたして、私の部位を、それぞれの精神を、無数にある意識自体を、さらにもっと古くからある傷を重ねて、それは醜い瘢痕となってそれぞれの表層に複雑な皺となって残される。もう、元には戻らない、戻ることはありえないのだ、と。

そのとき私は目くるめくような暗い情熱に衝き動かされて、私の外部に牙を、矛先を向けざるをえなくなるのだ。それは、決して内部に振り下ろされる斧ではなく、外に向けられるべき一撃。振り下ろされつづける打撃。だが、暗く熱を帯びた暴力が突出するのは、その一瞬だけである。その後は冷酷な暴力の残渣が機構として無際限に繰り返されていく。深傷を負うのは私の表層であるが、すでに亀裂、破砕は全体へ及びはじめてしまっている。

そもそもの原因がおれにあるということはありませんが、かといって原因がもたらす次の原因からも無関係であることにはならない。そのこ

とはおれ自身もよく分かっているつもりだ。おまえの場合とは異なって、おれが完全な抑圧の環境に置かれることを願っている部分がおまえにあるに違いないが、なぜそのような願望をおまえが所有する必要があるのかを、おれは許しがたいものとして、おれの深まりの底に沈潜させているのだ。

だが、それにもましておれにとって真に許しがたいのは、そのようなおまえではなく、おまえを通したおまえの向こう、おれを通したおれの向こうそのものの、連綿たるつらなりそのものであるに違いないのだ。

おれはただ血を見るのが好きなわけでもなく、肉が裂け、骨が砕け散るのに快樂をおぼえているわけでもない。なぜなら、破壊されるものはおれ自身を含んだ、おれの不幸でもあるのだから。

おれはただ単におれ自身を壊滅的に追いつめることにおれ自身の理由を見出そうとしているのかもしれない。

灰色の夕暮れの第二景。ふるえる心臓。このとき、つきぬけるような戦慄を、私はたしかに感じていた。だが、それは実現不能な範疇にある行為なのである。自らを放棄することで生起する衝動、自らを拒否することによってのみ可能な敵意、自らを犠牲的につらぬくつらなり全体の無化への企み、それはあまりにも無意味な行為の突出であるからだ。それゆえ、すでに行為ではなく、切り離された行為の断片なのである。

しかし、その衝動の素片こそ、突出する暴力、暴力の突出とでも名づけるものである。私は彼が、彼の皮膜を破裂させることで、私と私を通した連鎖の階梯すべてを自らの内部に閉じ込め、閉じ込めた内部の樹木として、自らとともに無化させようとするその無意味な意志を感じていたのである。

だが、世界が円環を結び、宇宙が開いているかぎり、反世界も反宇宙も、ただ世界と宇宙に包囲されている人形にすぎない。はたしてそうなのか？

私自身、世界によって抑圧されていることは間違いないし、同時に彼を抑圧していることもまぎれもない事実である。だが、だからといって抑圧を正当化することが可能なのか。あるいは可能だとして、何をもって可能であるというのか。

おそらくここに過誤の種子がひそんでいるのかもしれない。また、そのことがあがきを現前させている。二つに引き裂かれる意識、引き裂かれることによって増殖する意識、あがきがいたるところにあふれ返る。〈われわれ〉に自由はあるのか。

私は救われることはない。彼もまた救われることはありえない。だが、何から救われるというのか、何が救うというのか。あるいは、私は彼を救うことが可能かもしれない。——私を救うということを犠牲にして。いいかえれば、彼を犠牲にすることで私が救われるということになるのかどうか。また、彼が自らを救うことが可能だとして、それはそのようなことと同一のことなのかどうか。だが、自己救済は自らの内部によってすべてを包囲することで可能となるはずなので、この場合、そのようなことはまた別の問題であるのかもしれない。

だが、この救いがたさはどこからやってくるのか。そのことも大きな

問題であるといえる。私と彼は、すでに分ちがたく、その問題とも結びついているからだ。

おれがおまえとの関係の形を変えること、また関係そのものをも消滅させることができないと断定するべきではない。おれが囚われているというのは、おまえの側からの見方で、おれはおまえとは完全に無関係であるともいう。また、視点を変えれば、おまえがおれに属しているのだともいえるということは〈すでに記されている〉のだから。

許せないもの、許さないもの、また許すということ、許さざるをえないこと、したがって許しを乞うことにあるのではなく、おれに許しを乞わせるものの存在とその強制が、あらゆる暴力的形態を剥奪していく。威嚇の形をとらない恫喝。

おれのこの暴力の突出とは何か。あるいは暴力への期待とは何か。それは理性的であるか、非理性的であるかにかかわらず、普遍的な暴力、裸の暴力とでもいいうるものだ。もちろん抑圧する側の暴力もそこには含まれるし、抵抗する側の暴力もそこには含まれる。磁力が臨界に達したときも、また磁場を失うときも——暴力の突出は期待される。

彼は、私がすでに失いかけている暴力の意志を呼びさまし、私の抱いている暴力への期待を費消させようと企んでいるに違いない。私もまた彼と同じ場所で踏み迷っているのであるから。

地表すれすれで棲息しているのは私ばかりではない。蛇のように低い吐息を這わせているおまえたち、闇の匂いを蓄積させた路地の、地べたの種族――。

おまえたちは蹲っているような沈潜の仕方で、地面に沿って平たくのびきってしまったている。実際、おまえたちはすべての存在と同様に個々の曲率に支配されて、それゆえに永遠の平面にまでのびきっているはずなのだ。

むっくりと体を起こしているのは、やはり影の部分。その影の奥のつらなりの影の内部というものにその根はあった。根があるというよりも、その存在は裏返された形のままの空虚であるに違いない。影の中の影の部分も体をもたげ始めた。影のつらなりのすべてが、永遠の鏡像のすべてのつらなりが、同じ傾きをもったまま、ゆらゆらと体をもたげ始めている。

私はおまえたちにとらえどころのない類縁性を感じている。それは、おまえたちのいずれかの特質にかつて私の何かが関わっていたことがあるということなのだ。私は、すでに私ではない別の私の系譜を思い描いているのかもしれない。それとも、いまだその呪縛と密接に関わっているとでもいうのか。

おまえたちは私を呪縛する。しかし、私はその呪縛が私に属しているのか、私を属しているものに関係しているのかを知る術がない。懐かしい匂い、体の奥が引きずられるようなおしさ、脂にまみれた感触、体をくるむ体毛の記憶、何も考えることのない安逸さ、身をゆだねることの持続――。

おまえたちは答えない。答えることを退けているのではなく、答える必要のない持続があるばかりだ。私はただおまえたちを通して、呼びさまされる何かを感じている。それが何であるかは別にして。それはそれぞれの内部に根強くあるものではなく、表層のありように起源するものなのかもしれない。なぜなら、つらなる無限の鎖はそれぞれの磁場を形成し、それらの磁力によって影響しあっているはずだからだ。

腐りかけた足をこうして引きずりながら地を浚い、あるいは地べたを

爬虫類のように滑り回るおれたちの姿を、おまえは自分自身の影であるかのように思い違いしているのかもしれないが、それはおまえ自身がおまえを見失っているか、忘却しているか、あるいは実はおれたちのことを遠い昔から知りえていたという錯誤に起因しているに違いない。おれたちは起き上がるもののすべての起源に関与している、無窮の平面に沿うものの来るべき未来に関与している。それは汚れた暗い血と得体の知れないものどもの婚礼と交合と裏切りに充ちているからだ。

権力が婚礼を支配する——、このことを肝に銘じておくべきだ。誕生も、血の相続も、おまえを支配するものへの従属の聖痕を与えられているのだから。呪うべきはこの連綿たる影、影をつなぐ連環、永遠の過去、永遠の未来、永遠の現在を貫くもの。

私は、おまえたちがなぜ、知ること、つまりすでにあることの認知とは無縁なのかを考えざるをえない。おまえたちは二次元を颯爽と滑降し、その視線の先には地べたに記されたありうべきもない系統樹がある。おまえたちこそ、すでにあったものではなく、ありえぬものの具体化に関与しているのかもしれない。与えられた（つくられた）知の発見ではなく、その〈与件の発見としての知〉のそもそもの出自を疑い、それを自らの創出によって覆すために。

だが、それでも、私は繰り返さざるをえない。生命の連鎖、DNAの継承の前に。——滋養とさせられる存在、啖われるもの、ただの肥やしだ、亡霊になってさえも！

地面を引きずって徘徊するその意識は、決して地面に引きずられてはいないのだと叫ぶ。だが、天井からは継母の祝福されざる黒い血が滴り、屋根裏部屋の床一面には重力の破産を示す熔解した天体の落下の痕跡が見られる。痕跡は鉱物の形をとるのか、植物の姿となるのか、あるいは生々しい肉そのもの……。すでにこの世を後にした意識は、物質と物質との関係は、意識と物質、意識と意識の関係でもあるのだと言い残していた。その意識が向かったのは、向こうから押し寄せてくるものがとうてい看過することのできない反撥と激突とでもいうべき鋭い亀裂。

意識 B は逃れること、逸脱することはできない。だが、本当にそうなのか？ もちろん、B は B 自身をつなぎとめておく。そうすると、B は B 自身にとって誰なのか？ B は B 自身を押し潰そうとしている範囲に囚われているだけで、その一部、あるいは付属しているものではない。たしかに B は奴隷のような存在であることを強いられてはいるが、敵意を失っているわけではない。B は堪えているに過ぎないのである。——何に？

私はここで素朴な疑問に直面する。その薄い皮膜がどちらに属しているのかを、いったい誰が知っているのか——。

まさに〈私〉が息を終えようとしているその刹那に、〈私〉を唆して飛び立たせようとするものがいるのだ。〈私〉は羽撃くものではないし、翼、鱗、跳躍に適う強い脚をもつものでもない。天使のように無残な光輪も、醜く硬直した幼児的な微笑も持たない。ただ、たしかに深い憎悪と鋭い敵意を抱きながら囚われつづけている、まさにその接触面にいるのである。〈私〉を解放しようするものが現れたとしても、〈私〉はその欺瞞と悪意を見破り、何ものに対しても完全な侮蔑と敵意を失うことはないだろう。〈私〉はあなたに対してさえも、またこうした自分自身の重複せざるをえない意識の連鎖に対してさえも、〈私〉を囚えているものに対する反抗と同質の〈反抗への意志〉を欠かすことはないだろう。

ところで、意識 B の分身である B' は、B と同時に、異なった磁場で

モノローグをつづける。つまり、Bのことは底にB'のことは含まれ、B'もまた匿されていたのである。そのB'はすでに失われた者たちの列の向こう側にあり、暗い眼窩の奥にある空虚は蒼く錆び落ちようとすることばの炎ほむらに閉ざされている。B'にまつわる記憶といえば、ことばの持つ磁力と重力の激突を想起させるハレーションというべきかもしれない。ただ、ときおり、血腥いものが曲面と曲面のつなぎ目、曲率の移動するあたりに沁み出していた。それはB'が重力を認識しはじめてから、B'の内部へと沁み込む重力の形象。B'の内部はBの失われた領域、非在という部分。

追記

本稿はいまだ連載中のものであることをお断りする。



素描, 鉛筆, 紙, 210×148mm

小説 自由とは何か * 2004年11月7日発行 * 発行人 紙田彰 * 発行所 〒134-0087 東京都江戸川区清新町1-1-22-106 * 電話 03-3686-5915

限定 150 部